公民館クラブ紹介 ⑧

古典文学に浸る

謡曲クラブ

謡曲は「謡（うたい）」とも言われて「能」の脚本として、また、声楽的な要素として、遠く室町時代から「能舞台」で謡われてきました。

五つの流派があり、謡曲クラブで習っているのは、一般的に広く謡われている「観世流」で、二百二十曲があります。

そのうちの一曲「羽衣」の物語りは――

「春の海を控えた三保の松原の、とある松に美しい衣がかかっていたので、白龍（漁夫）は、取って帰ろうとする。そこへ天人が現われて、『それは私の羽衣だから返してください』という。いやだと言うと、それがないと天にかえれないのです、と嘆き、空を懐しげに見上げる。その哀れな様子に心を打たれた白龍が、天人の舞楽を見せてもらうのを条件にして衣を返す。（中略）天人は、しばらく袖をひるがえして舞っていたが、やがて富士の山よりも高く、かすんだ空の彼方へと消え失せた。のどかな春の海に青々とした松原、遠景には富士山が見える。そういう情景の中で、美しい天人が舞いながら昇天する。」――まさに一幅の絵のようで、ふっと忘れていた何かを感じさせてくれるものがあります。

クラブ長の土屋源吾さんは、「その時代の言葉と生活・考え方が理解でき、文章が非常に優れていることがわかります。

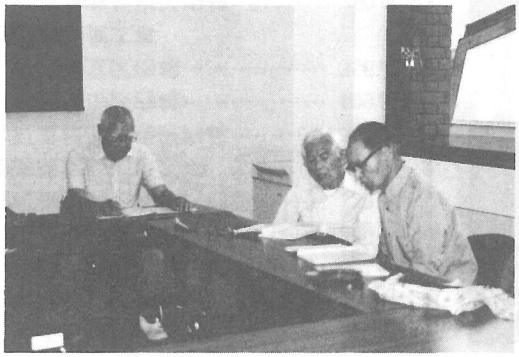
お腹から声を出しますので、健康にもよく精神修養にもなり、人の前でも物おじしなくなります。」と話しています。

クラブの指導にあたっているのは古川の西川宗保さんで「謡曲は古典文学として優れており、最初は難しく感じられると思いますが、それだけに伝統芸能として習いがいがあり、奥深い味わいがあります。」とのことでした。

練習日は、毎週金曜日午後2時から4時まで。

クラブ員は6名と少ないため、今、クラブ員を募っています。初めての方も、ぜひ、加入してみませんか。

申し込みは、土屋源吾さん（☎㉜0074）へ



古典文学はいいものですね

文芸

俳句

秋天に子の手逃れしゴム風船　宮内　澄男

満天星（どうだん）の二日の雨に彩かさね　勝又やすのり

どん尻を走る子のあり一位の実　鈴木　草庵

床柱つるりと光る夜寒かな　鈴木　南知

金木犀活けて厨の妻であり　戸村　静華

歌人逝く万句を残し惜しむ秋　行方はじめ

木犀や垣越す声の憚らず　藤代　ゆう

干ひらめ骨透け見える夜寒かな　山口　一秋

亡夫送る老妻手に持つ菊ゆれて　若梅あやめ

夜寒の灯書架の背文字に届きをり

（選者）土屋　栗水

短歌

足うらの水疱そうが痒いらし幼はさすれと我が手持ちゆく　鈴木　やす

青刈り跡より出でし二番穂の短かき稲穂重く稔れり　木川　布佐

釣り糸をゆさぶりながら鯉はいま水面に銀のうろこを浮かせり　伊藤　文子

いっせいに伸びし風草穂にたちて淡く波うつ秋の野の道　秋葉　悦子

畔に咲く泡立草の一本を供花に手折りて友に供へつ　秋葉　とく

常臥してなほ気を配る義妹よ包帯す帯する吾（あ）の手案ず　池田　春江

他愛なき話に秋の夜は更けぬ一晩泊まりで帰り来し娘と　宇井　ちい

人民服のイメージ強き中国の選手がハイレグの水着に並ぶ　大場　和可

頂きし給料を手にこの日頃ほしと思ひしスーツ買ひたり　鈴木　サツ

降りてゆく身を包みきぬ地下庫に醸成を待ちワインは香る

（選者）斎藤つね子